

「アメリカで何をつかみとりたいか」

北海道室蘭栄高校 理数科 2年 苫米地柚季

私がアメリカでつかみとりたいもの、それはアメリカの特別支援教育について知ることだ。

私の将来の夢の1つに、特別支援学校教諭がある。小学5年生の時、「光とともに…～自閉症児を抱えて～」という漫画を呼んだのをきっかけにこの職業を知った。この漫画には、自閉症をもつ光君の誕生から中学2年生になるまでの家庭や学校でのストーリーが描かれている。私はこれを読み、自閉症の事を初めて詳しく知ったと共に、自閉症が社会であまり認知されていなかったり、教師の中にも発達障がいや特別支援教育について理解していない人がいるという事実にとっても驚いた。それから、光君のような子ども達のお手伝いをしてみたい、障がいをもつ子どもへの悩みを持つ親の支えになりたいと思い、特別支援教諭という職業に興味をもつようになった。また、学年が上がるにつれ特別支援学級に通う同級生との関わりが薄れてしまったこと。勉強が苦手で作る気がなく授業を妨害するクラスメイトがいたこと。それらの現実違和感や不満を抱えつつ送っていた中学生活もまた、私の特別支援教育への関心を大きくした。

そんな時、私はある本に出会った。「星の国から孫ふたり バークレーで育つ自閉症児」作家の門野晴子さんが綴った、北カリフォルニア州のバークレーに住む孫、自閉症の兄妹の記録である。

この本と続編の「Gifted Child」に、私は衝撃を受けた。漫画と同じような時期に書かれているのに、アメリカの自閉症に対する理解や特別教育はずっと進んでいたからだ。まず、アメリカでは当時から早期発見・療育に力を入れていて早いうちから複数の専門家によって診断されていた。光君が、検診で聴覚障がいと誤診されたり、検診から福祉センター、病院へと回されていたのは大違いだ。日本では障がい児の受け入れがない園も多いという保育所や幼稚園も、兄妹は公立のプレ・スクールやキンダーの特別教育クラスに通っていた。一番驚いたのは、アメリカのIEP（個別指導計画）。支援を必要とする子どもの教育計画書のことだが、これの作成に、学校の先生方・校長先生・様々な専門家、カウンセラーとソーシャルワーカー、家族と、計10人近くで定期的に何時間も話し合いをするのだそう。漫画には福祉センター、幼稚園、学校、専門家、親のつながりがないと光君の母親が嘆くシーンがあったため、アメリカのそれはとても素晴らしく感じた。また他にも、小さい頃からカウンセラーやベビーシッターが週に数回定期的に訪問療育に来るなどの手厚い支援にも驚きだが、さらにすごいのはそれらの予算が州の障がい者センターや学校教育局から出ていると書かれていたことだった。

今回のプログラムには、現地高校の体験入学がある。特別支援学級の環境を実際に見たり、アメリカの特別教育について教育現場で日々働く先生方に聞いたりしてみたい。アメリカではできるだけ特別支援学級と通常学級を分けない方針をとっていると本で読んだ。

現地の高校生に、特別支援学級に通う生徒との交流について質問してみたい。残念なことに、本の最後にはアメリカの不況による教育費不足とカリフォルニア州での教育費の削減による特別教育の質の低下が書かれている。それから約15年後の今、バークレーと同じカリフォルニア州にあるロサンゼルスでの特別教育や療育の現状を知りたい。そして将来、特別支援学校教諭として働く際、アメリカの進んだ特別教育の良い点を取り入れたいと思う。また、障がい者福祉の質が高いということは他の福祉も充実しているのではないだろうか。リタイアメントホーム訪問や低所得者への食事配給ボランティアはアメリカの福祉に対する姿勢を知る貴重な機会になるに違いない。

私には、もう1つ将来の夢がある。それは発展途上国で教育開発といった国際協力をすることだ。特別支援学校教諭と国際協力師、一方に絞らなければと焦っていた今年の夏、オープンキャンパスで、発展途上国での特別支援教育の教育開発がテーマの卒論を担当している障害科学類の教授にお会いした。また、国際総合学類では「国際協力には国際関係学の知識だけでなく専門分野の知識が必要」というお話を聞いた。この2つの出会いを通して、私は両方目指すようになった。国際協力の現場には、英語力だけでなく、現地への順応力、様々な国の人と一緒に働くための協調性が求められる。このプログラムを通じてアメリカの文化、習慣、価値観を知ることが、私の視野を広げ、考え方を柔軟にしてくれるはずだ。

私がアメリカでつかみとりたいもの、それはアメリカの特別支援教育や療育について知ること、広い視野、柔軟な考え方である。これらは私の将来の夢への1歩となるだろう。自分から積極的につかみとりに行き、いつか必ず北海道や世界で困っている子どもやその家族に還元してみせる。